

平成四年四月十九日 和敬塾入塾祭記念講演

「大学生活の過しかた」

亜細亜大学学長 衛藤藩吉先生

おはようございます。本来ならば、私の専門の話をするところなのでしょうけれども、実は五年前に亜細亜大学の学長になり、学生諸君とは大変緊密につき合うようになりましたし、いろいろ大学について考えるようになりましたので、今日は、学長になってから五年間のまとめをさせて頂きます。

私は日本の学校教育の中で最も成功したのは旧制高校だと思っております。私自身、家庭を離れて、駒場の旧制一高の寮に入りまして寮生活を体験しました。それによって初めて同じ釜の飯を食う友達が出来ましたし、そこで精いつばい人生を生きることを覚えた。その前に、受験勉強と称するものをしておりましたけれども、受験勉強というのは私にとっては大変灰色で、苦痛で、ただひたすら、高等学校の試験に通ったら、うんとやりたいことをやろう、読みたいものを読もうと思つて耐えたのです。高等学校に入りましてから、乱読をいたしました。ものすごく本を読んだ。寮は今の駒場寮で、

キャンパスの中になりました。私はラグビーをやっていたものですから、だいたい夏は六時頃まで、冬は五時ちよつと過ぎると真つ暗になるからそのころまでラグビーをやつて、その後夕食を食べましてから、九時に図書館が閉まるまで必ず図書館に行きました。固い本は読まないで、読みたい本を読んで、それから部屋に戻つて、飲みに行つたりなんかしていました。そういう生活をやつて、それから朝、割に私は早く目が覚めるのですが、七時頃目が覚めて、朝ご飯を食べて、授業が始まるまで机に向かつているという生活をやつておりましたが、今でもその時の寮生活が私の人生の糧になつたと、思っております。

現在の大学生を客観的にみますと、日本の平均的大学生につきまして三つぐらい、我々から見て顕著だと思ふことがございます。一つは、大学生は勉強を目的としていないこと。一昨年、株式会社学生援護会が日米の学生意識を調査したアンケートによりますと、アメリカ人の大

学生にとつて、大学生活で一番大事なことは、講義、実験、ゼミ等に参加することであると答えたのが七割。日本の学生は一割。諸君の内、十人に一人しか勉強しようと思つていないということになる訳です。この調査はあまり正確でないかもしれませんが、大学がレジヤラーンドと化している。東大の駒場で覚えたのがマナージャンだけであるとか、そういうことが公然と言われる時代であります。

事実、大学生活が学問の為にとか、或いは真理探究の為にとか、というふうに言われる時代ではなくなっている。諸君は夏目漱石の『三四郎』をお読みになつたことがある？ まあ、ない人の方が多いかもしれないけど、あの中に熊本の旧制五高から出てきた主人公が、東京帝国大学で学問に淫しているような人達とつき合つて、そういう人達に大きな影響を受ける風景があります。そういう意味での大学生活はあまり学生諸君は期待していないこと、これは現実であります。

第二に、にもかかわらず、学生諸君には多くの特権がございまして、モラトリアム、世の中から甘やかされて、そしてそれで済む。済むのが日本社会であります。こういう話がありまして。亜細亜大学では年間七百人ぐらい、まあ今年はもつと多いですが、アメリカの大学に一年期間、留学させております。日本人学生ばかり七百人が一つの大学に集まったらいけませんから、あっちこちの大学と散らして留学させております。留学前に繰り返し、繰り返し言っているのは、日本では大学生だと言うと大抵のことは許してくれる。例えばお酒がそうですね。未成年であっても大学生が飲んでいるのであったら大抵許してくれる。が、アメリカはそうはいきませんよ、ということを繰り返しオリエンテーションで教えているのですけれども、やっぱりいかん。それで向こうへ行って、未成年なのにビール買ったりウイスキー買ったりする。そして買う時しばしばIDカード見せると言われますから、成年に達した友達のIDカードを借りて行ったり、パスポートを借りて行ったり、そういうふうにして買う。さかんにやるわけですね。それをやめろと言うのですけれども、なかなかやめません。とうとう去年見つかりましてね、即座に逮捕されて、すぐ、猶予無しにインダイト、起訴された。それで、FAXで起訴されたということが東京の私のところ

へ報告されてきましたので、わたしは放つとけと言ったのですが、日本人の先生方の騒ぐこと騒ぐこと。逮捕された、大変だ、どうしたらいいだろうと言うから、もう放つときましようよ、逮捕されて、お巡りさんの訊問にあい、それから検事の訊問にあい、裁判所に行けば、こりゃ稀有の英語の勉強になる機会だからもういいじゃないか、と言って、まあ一所懸命先生方をなだめて、放つといた。それで、裁判所に出されませんでした。しかし判決の日はね、なかなか判事はよかったですよ。その大学にいる日本人の留学生全員に、法廷に傍聴にいらつしやいと連絡を出した。ぞろぞろ集まってきた。傍聴席は満員ですね。そこで判事は、法律は国によつてちがう。国によつてちがうけれども、その国に入ったたら、その国の法律を守らなければならないのだということを、たいへんきれいな、たいへん丁寧な英語で話したそうです。そして、微罪釈放となったそうです。が、そういうことは、アメリカでは当然のことである。学生だからといって容赦はしません。しかし日本では学生だと見逃してくれる。それから大学というところは大学自治がございまして、大学の中ではかなりでたらめなことをしてもよろしい。東大、京大などは警察権力もなかなか入らない、ということがございますから、モラトリアムとしばしば言われておる。人生の執行猶予のとき、

でございます。これが第二の現実ですね。それから第三には日本の大学では、そういうふうにして十分な時間が与えられ、人生の執行猶予の時期なので、それを勉強に使うかという大部分の人は勉強に使わない。何に使うかというアルバイトに使います。亜細亜大学に於ては七割がアルバイトをします。ところが戦前におきましては、アルバイトをする人は苦学生だった。つまり、生活にゆとりが無いから、親が充分に授業料を払えないから、仕方なく苦学をしていた。私自身が高等学校で一緒に暮らした連中の中でも、親の貧しい学生が家庭教師やなんかをやっていた。だから一クラス四十人でしたけれども、そのうちの二人か三人がアルバイト、家庭教師をやっている、他の連中はやらなかった。今は逆転しているのです。諸君もきつとそういうふうになるでしょう。それでは、それは苦学しているかという、そうじゃないのです。典型的なのは親から金もらつていて、アルバイトしたお金で自由に外国旅行したり、酒飲んだり、新宿で騒いだり、そういうことに使われる。つまり、アルバイトの収入というのは遊ぶお金である。これが現実であります。いや、この頃になると、学長として困ることがあるのです。亜細亜大学には、ものすごく留学生が多いのです。五百名以上おります。その内の約半数が女子学生なのです。学生達は、短時間

で高収入のアルバイトを探すようになる。端的にいえば、女子学生なら水商売です。皿洗いとか、あるいはロイヤルホストのウェイトレスとか、そういう、いわばディーセントと言える、恥ずかしくない仕事をやると、なかなか水商売ほど収入が無い。かといって大学は、水商売の学生がいたとしても強制的に止める訳にもいかない。戦前にはそんな悩みは全然なかったのだけれども、今、我々はこうした問題もかかえているわけです。つまり、学生というのが労働予備軍であるから、その労働のありかたについて真剣に考えなきゃいけない、という問題が発生しております。

以上、三つ挙げました日本の大学生の顕著な行動、パターンというのは、一つは大学を勉強するところと心得てない学生が大変多い。それから第二は執行猶予の状況、社会における執行猶予の状況である。その意味での特権階級。そして第三に労働予備軍である、ということでございます。

それでこそ、私は、今いずれにも逆らおうとしているのです。つまり、学生に勉強させようと思っております。そして、執行猶予ではなくて、社会人として責任を持ってやらせようとしているのです。それから学生に必要なアルバイトはするなど言っているのです。つまり学生らしくないアルバイトはするなど言っております。

す。それぞれに実は改め甲斐はあるのです。例えば、大学を勉強するところと心得ないで入ってきた連中、これをひつつかまえてですね、勉強の面白さ、勉強の辛さ、勉強の必要を教えるのが大学じゃないか。そういうふうな教育をやりましょう、それはやりががありますよ、と先生方に言っているのです。このことについては後ほどお話致します。

それから第二に執行猶予。その特権の中でもって学生は、世界を見る目を養おうじゃないかと。息せききって社会のいろいなしきたり、その他に縛られていないで、もつと自由に世の中を見ようじゃないか。

それから第三に労働予備軍であるから、いい仕事を世話しようじゃないか。例えばキャンパスの中のアルバイト、これは外国の大学では非常に多いのだけれども、なぜだか日本の大学では自分のところの学生を使わない。東大は自分のところの学生をキャンパスをきれいにするのに使わないで、おじさん、おばさんを雇ってやっている。亜細亜大学の学長になりましたから、学生にきれいにさせようじゃないか、学生のアルバイトに図書館の出納やその他やらせればいい。リサーチチャーとしての仕事だつてやらせればいい。と言うのですけれども、なぜだかそれをなかなかやらせない。それから、高等学校まで礼儀作法を覚えとらん。「おはよう」も

ロクロク言いきらん。それだったらロイヤルホストやモスバーガーやそういう所にアルバイトさせると、頭の下げ方から教えてくれる。スーパーマーケットに行っても同様です。そういう所でアルバイトするのはいいじゃないか。亜細亜大学に礼儀作法を教える能力がないのだつたら、そういう所のアルバイトさせれば、みんな行儀よくなつていきます。女子学生なんか会釈することも覚える。ありやいいじゃないかと、そういうふうにして、現実を逆に取って、学生諸君の為になるような教育をできないかということ、今、考えているのであります。

さらに大学でも、人間性に立ち入ったような教育をすることが必要な時代に入ったとは思っています。亜細亜大学の卒業生はみんな、人間性を豊かにするために寮を再興しろ、とアドバイスしてくれます。というのは亜細亜大学は二十年ほど前までは寮がたくさんあったのです。ところがオンボロ寮でね、六畳一間に三人ぶち込むとかやっていたものだからだんだん入り手がなくなりまして、学生の方が贅沢になつて次第に寮をつぶしていったのです。大学にとつては寮というのは高くつきますから。それで、今、二百人位しか寮生がいらないのですね。それを昔に戻せ、としきりに言うのです。これは私は、一つ考えられることだと思っております。私がモデルにしているのは麗澤大学なので

す。麗澤大学といつても、諸君、知らんかもしれないけれども、柏にある小さいけども素晴らしいところですよ。そこでは高等学校から全寮制度を原則としておりまして、そして大学の中のいろいろな仕事は全部、学生がやるようにしている。じつと見ておきますとね、私のようなお客が行くとするでしょ、そういうお客様にアテンドする人はすべて学生、しかも四年生が自らお茶くみをやるんですね。一年生はそれを見習う。一番働くのは四年生、その次三年生、で二年生、一年生なのです。亜細亜大学は逆なのです。運動部なんか見ておきますと、四年生は威張った格好して、タバコを吸おうとすると、一年生が急いでパツとライターをつけて出すのです。それを見ていて、私は麗澤大学の方がいいなと思っております、麗澤大学のような、偏差値は低くても人間としての教育をちゃんとしたいなと、今、思っております。私は和敬塾については実はよく存じませんが、伝え聞くところでは、そういうごく日常的な行儀作法やなんかを教えて下さるそうで、これは大変大事なことです。就職試験の直前に、付け焼き刃でやった行儀作法と、自ら身につけた行儀作法とは質的に違う。ぜひそういうことを、つまらないことだと思わないで頂きたい。

亜細亜大学で私が学長になった時、一番先に決心した事は、なんだか想像つきますか。この

無名の大学を復興するためには、人間的な親しみを感じさせなきゃいけない、人間関係をよくしなきゃいけないと思いました。人間関係をよくするのは、笑顔は世界に通ずる共通の言葉ですね。それから朝晩の挨拶がいいだろうと思ひまして、無理して笑顔をつくることを考えた。今も一所懸命やっておりますがね。この頃は大自然にでるようになりましたが、話すときは笑顔で話すこと、これをやりましょうと決心した。それからもう一つは、こちらから挨拶しよう

と決心したので。今でもやっております。学生つかまえて「おはよう」と言っておりますし、先生方、それからお掃除の人、事務の人、若者男女にかかわらず、こちらのほうから挨拶をするよう心がけておりますが、五年経つと雰囲気が変わってきました。この頃では教員諸君が職員に対して挨拶をするようになった。私が行ったときは、すごかったよ。大学教授というのはよっぽど偉いんだとみえて、キャンパスを歩いている。そして若い職員なんか「おはようございます」と言う。そうすると「ああ」とつぶやくだけで会釈はおろか、ふり向きもしなかったのです。それがだんだん改まってきた。それから職員も、掃除のおばさんなどには全く会釈しなくて、知らん顔して過ぎて行った者もいたのでありました。この頃は掃除のおばさんが廊下を掃除していると、皆通りすがりに「おは

よう」と言うようになった。それから大学の中をなるたけ俺達だけできれいにしようじゃないか、というふうには、教職員、学生に呼びかけましたら、これはなかなかうまくいかないのですけれども、それでも学生自治会が月に一度、朝、キャンパスを掃除してくれるようになった。これは自分の大学なのだからボランティアでなきゃならん、だから金は出さず、一時間いくらなどというお給料は出さないとすることにしておりますが、テレホンカードくらいならよからうといつて出しております。去年からは通学路が汚い、武蔵境の駅から亜細亜大学までの通学路のタバコの吸殻、それから紙切れ、飲物のから、そういうのがいっぱい捨ててある。住民からも抗議が来ているというので、これをなんとかしようじゃないかと学生に呼びかけて、これは一学期に一度でありますけれども、学生教職員、有志を動員して清掃しております。呼びかけるとけっこう集まって、二、三十人は集まりますから、きれいになるのです。昨夜も帰りにそこを通ったのですけれども、随分きれいだった。このように昔と違って、戦前だった小学校や中学校でやらなきゃならないようなことを、大学でやろうじゃないか。子供の時、そういう躰ができてないのだったらしょうがない、大学でやりましょうと訴えています。そういう時には、寮生活するのはものすごくいい

んじゃないかと思うのです。

和敬塾がどうなのか、そこは私詳しくは知りませんが、ただ一つ、とても嬉しい話を覚えていて。今から二十年くらい前、日本人と一緒に暮らしたいという留学生の一人をここに紹介したことがあるのですが、確か住まわせて下さったと思うのです。非常に喜びましてね、長い間、クリスマスカードなどを送って来て、とても日本語もうまくなったし、日本の社会にも馴染んだし、とてもよかったですと思っております。こうやって見渡したところ、外国人らしい顔も見えますから、多分和敬塾もそういう意味で、私が期待しているような寮として、いろいろなことを努力していらつしやるだろうと思います。それはとてもいいことで、新しく高等学校から入ってきた諸君は、もう大学生なんだからそういう束縛は嫌だと思われるかもしれないけれど、実は諸君の大部分は、一般社会で当然の行儀作法や規律を束縛と感ずるほどに、躰ができていないのですよ。これは亜細亜大学でもそうなのです。学生諸君に言うのです。君達はキャンパスをきれいにしようという意欲がないほどに、躰ができとらん。だから、大学でそういう気持ちを持つよう、ひとつ努力しようじゃないかと。挨拶をしなくてもいいんだ、挨拶なんてどうでもいいと平気で思うほどに躰ができてないのだから、しかたないじゃないか。

いか。大学でそれをやりましょう。そういうふうに申しておりますが、同様なことは、実は大学教育の中でもいくつかあります。

例えば英語。英語というと、諸君は大学でシイクスピアを勉強したり、ジョン・ステュアート・ミルを読んだり、カーライルを読んだり、そしてひどい先生になると、チョーサーを読ませたりする。しかしそれは戦前の大学、または英文学を専攻する学生のためのカリキュラムなのです。それよりも、今、学生諸君の大部分はまともに会話もできんじゃないか。国際社会で活躍しましょうと志している日本人が、国際社会の事実上の共通語であるところの英語を喋れなくて困るんじゃないかと私は考えました。ビジネスをやるのに、インドネシアに行ったら、アフリカに行ったら、英語ですよ。ラテンアメリカに行ったら、英語です。英語ならばどうにか通じる。まあ通じないのは中国ぐらいでね。ロシアだって通じます。それから学者になつて学会に出ると、報告は日本語ですると具合悪いですよ。誰も解ってくれないから。私も学問的な業績を日本語ではたくさん出しています。だけどそういうのは国際的に読んでもらえない。読んでもらえるのは何かというと、必死になつて英文文をした英語の論文なのです。これは自然科学のほうではもつと厳しい。だから諸君、英語やりたまえ。それも役に立つ

英語をやりたまえ。喋れる事、それから書ける事、ごく普通なことを書ける事。十九世紀の英語で書くんでなく、今の英語で書くのです。それから読めること。チョーサーは古代の英語ですから、それは読めなくていいから、新聞や、企業が出すレポートは読める。そういうふうにしなきゃいかん。そうなつとらんのが日本の大学です。なつとらんのならば、亜細亜大学はそれをしようじゃないかと教員諸君に訴えました。話したり書いたりする訓練で一番いいのは、その言葉を話す国へ行くことです。一所懸命留学し易いようにもつておりますし、アメリカで取つた単位は亜細亜大学では認めるようにしております。はじめ、教授諸君の反対ははげしかったです。フランス語やドイツ語を忘れることはけしからんと言う、フランス語やドイツ語の先生も多かつたし、それから英文学をご研究なさつた先生は、「長崎通事」を養成するのはよくない、大学はアングロサクソンの文化的背景を研究し、理解させるために英語を教えるのだから、喋る、書くだけじゃいかんとおっしゃる先生もいらつしやつたのですが、それを一所懸命説得しましてね。英語が下手で苦労した僕がそう言うのだから、経験がそういうものを言わせるのだから、先生方、ひとつ言うことを聞いてくれと繰り返し繰り返し懇願した。教授会自治が

ありますからね、学長がいくらそうしようと言ったって教授会がうんと言わないとだめです。教授会をうんと言わせる為には、外国語の教授をうんと言わせなきゃいけないですからね。一所懸命、口説いた。そしたら、留学はいいけれども、飛行機が落ちたらどうするとおっしゃった。まあ、しょうがない、生命保険会社に生命保険でもたくさんかけておきましょうよと言ったら、えらく叱られましたね。それが教育者の言うことかというわけです。私は「はあ」って小さくなっちゃったんだけど、内心はそこまですごく心配していたら、危なくて通学もさせられないですね。しかたないから、事故が起こったら学長が責任持ちますと答えました。女子学生が暴行を受けたらどうする。自動車事故を起こしたらどうする。殺人事件が起こったらどうする。クレジットカードなくしたら誰が責任をとる、なんて、もうあらゆることについて言う。面倒くさいから、学長が全部責任負います、事故が起こったら私がすぐ飛行機で飛んで行きませんかと言って、おっ始めたんであります。そうすると学内の空気が見る見る違ってきました。一学期間でも向こうの大学について日常英語で話しております。特に私は条件をつけました。寄宿舎に入れてくれ、寄宿舎なしはコピーという、学生だけで自炊生活をする組織が

あるのです。そういう所へ入れてくれ、そして寄宿舎ではルームメイトは英語を母国語とする人にしてくれ、こう条件つけましてね。それで三年前から送り出ししておりますけど、結果は随分違ってきました。

だから諸君、生きた英語やりたまえ。これは今の大学に欠けておるものであります。日本の大学の大部分に欠けているものです。東大でも欠けとる。東大で私は国際関係論の教授でしたから、生きた外国語が欲しい。だから文学の教科書ばかりでなくて、例えば、アダム・スミスとかデービット・リカードとか、あるいはチャールルの第二次世界大戦史とかそういうものを読ませてくれませんかと言ったら、一言のもとに、パーンとはねられて、いけませんでした。役に立つ外国語、特に英語の習得、これが第一です。その上で余裕があったら第二外国語にうんと力入れたまえ。亜細亜大学ですら、一割以上の学生が第二外国語をものにし、そのうち何十人かは第二外国語で留学しております。うちはインドネシアだとか中国だとかマレーシアだとか、そういうところの大学と交流協定を結んでおります。たとえばアメリカで英語をやってきて、そしてその上でインドネシア語でもって国立インドネシア大学に留学しております。諸君、ぜひ能力ある者は第二外国語まで羽をのばしてやりたまえ。言葉がでないと駄目だ。こ

れが第一。

それから第二にです、日本の大学はお高くとまっています、社会に出てから絶対に必要な技術を教えようとしません。それは何かというとOA機器です。ワープロ、パソコン。諸君のうち法学部を出て、司法試験を受けようという人がいるでしょう。しかし、判例は全部データバンクに入っているから、パソコンを扱えなければ弁護士事務所ですら仕事しようとしても、うまくいきません。だから絶対にワープロ、パソコンは必要なので、昔の読み書き算盤の、書く方はワープロであり、読む方はパソコンだと言っているのです。だからこれをやらなければいけません。亜細亜大学はそれを教えようと思わないかということで、うちは電算機概論の実習をまず導入して、次にOA機器をやって、今年の新入生からはノート型の小さなパソコンを持たせている。それで日常的にパソコンやワープロに慣れてもらおうと思っております。が、これは、東大でも早稲田でもやらんでしょ。だから私が教えていた東大生はほとんどダブルスクールで、夜はワープロやパソコンの学校に通っていた。諸君も大部分の大学は、大学がそれやらんから、ダブルスクールを余儀なくされるだろうと思うけど、是非、これを身につけて欲しい。今の大学に欠けているものです。

それから第三はです、日本語です。社会に

出まして、おそらく諸君が一番困るのは日本語じゃないかと思うのです。なぜならば企業にしても官庁にいたしましても、普通の日本語を読み、書くことを要求致します。ところが、東大生ですら、卒業するまでにまともなレポートが書けないのがいっぱい居る。助詞の使い方、助動詞の使い方なんか、でたらめ極まる。敬語に至っては、でたらめ以下の、なっとらんというのが少なくないのです。これは社会では通らない。だから中学校、高等学校で、そういう日本語教育を怠ってきたなら、しょうがないから大学でやろうじゃないかということで、今、亜細亜大学で一生懸命、国語の教授を説得してやっておりますが、なかなか思うようにいかない。そのくせ就職時期になって、ちょうど今ごろになつてくると、四年生が、挨拶の仕方とか、やれレポートの書き方とかそういうのを一生懸命、応急策として勉強しつつある。一年生の時からちゃんと教えたら、そんな苦労せんでもいいだろう。行儀作法と同じであつて、自然に身につけているのが一番いいだろうと思つてましてね。一所懸命それを実現したいと思つておりますが、おそらく大部分の大学で、レポートの日本語まで直してくださる大学教授はおらんと思うのです。いたら立派なもんだ。かつて、明治の末期、日露戦争の頃、中国の作家魯迅が仙台の医学校に留学していて、その藤野

先生が、魯迅が書く日本語まで直してくれたという事で、魯迅はすごく感銘を受けて『藤野先生』という短編を書いている。たぶんそういう先生は今、マスプロ教育の大学でなかなか見あたらんと思うのです。私自身も、学生諸君が提出したレポートをそこまで丁寧に直すだけの時間的余裕がない。だとすれば諸君自ら、日本語についてしっかりやりたまえ。単語だけ並べているような日本語でなく、助詞、助動詞を使って、センテンスになるような日本語を話し書いて下さい。手近なところへ小さな国語辞典を置くこと、そして何か自信がない字が出てきたら必ず国語辞典をひくこと。是非、そうして頂きたい。これも日本の大学に欠けているところであります。

そういうふうにして、大学に欠けている、しかも社会にでてからは絶対に必要なものは、今、この執行猶予の期間に自主的に補つてほしい。

そして最後にもうひとつ。

さて、そうやって僕は、英語やりたまえとか、色々な機会に実地の勉強を勧めているわけですが、諸君は、ものすごい旅行癖、旅行がファッションになっていきますね。諸君の時代は、外国旅行の時代です。外国旅行者が昨年は一千万を超したでしょう。そしてその内の八割五分が観光客でしょ。観光客という中には、学生が非

常に多いのですね。半数ぐらい。ということは諸君は外国へ出る機会が非常に多い。

うまくいけば、諸君は夏休みや春休みなんか、外国でホームステイだとかいって、英語を勉強したり或はフランス語を勉強したりという機会に恵まれるだろうと思うのです。そういうふうには異質の文化に接触いたしました時に、是非注意して頂きたい、そしてできれば和敬塾でそういう教育をして頂きたいと思うのは、質実剛健であれということです。

我々は、今、統計数字の上では、世界有数のお金持ちです。一人当りのGNP二万三千ドルは世界で二番目です。どうもそれにしても、大衆も、この和敬塾も、アメリカあたりの大学や寮に比べると、貧しい。確かにそうです。この日本は領土も狭いし、経済繁栄が、またここ二十年のことでございますので、いわばストックの面では、確かにまだまだ貧しい。だからお金持ちという実感がない。椅子一つとつてみても、アメリカやニュージールランドの大学のほうが遙かによろしい。ストックという点では我々はそうお金持ちではない。しかし、フローという点では、お金の流れという点では我々は非常に豊かなんです。あなた方がごく普通に東京生活で使うつもりで、香港に行ったり、アメリカに行ったりしてお金を使うと、その土地の人から見ると、大変なムダ使い、贅沢になるのです。

香港で、観光客で一番お金をおとしてくれるのは台湾人、その次が日本人。それからアメリカで一番お金をおとしてくれるのは日本人です。オーストラリアでも日本人。諸君はフローの点では非常にお金を使う。これは実は大問題なのです。自分の金だから自由に使つていいじゃないかと思つてはいけません。自分の金でもムダ使いをしないということは、実は日本にとつては大変大事なのです。日本には何の資源もないでしょ。しかし、貯蓄率だけは高かったのです。貯蓄率が非常に高いから、資本の蓄積ができて、一九六〇年代の高度成長が可能だったのです。贅沢にお金を使つていたら、実はあれだけの高度成長はできなかった。資本の蓄積ができなかった。これからも同じなのです。あなた方は、これから大人になっていくに従つて、個人としてどのような経済困難にぶつかるかわからない。国としても、すごい経済の困難にぶつかるかもしれないですね。その時に、それに耐えていく為には、あなた方の生活程度は質実剛健であることが必要なのです。そして質実剛健であれば、あなたがどこへ留学しよう、と、妬まれたり、やっかまれたりすることはない。

一つ例を挙げると、ワシントン州の東の方、もうアイダホに近いところに、見渡す限り農業地帯ですけれども、チーニーという小さな町が

ある。そこにイースタンワシントン大学という大学があつて、そこに亜細亜大学から四十名ぐらい留学させた。大きなキャンパスで、皆自転車で教室から教室へ動くのです。学生が初めて町に着いた時、あつというまに町中の自転車売り切れた。町に一軒しかない自転車屋は、大急ぎで自転車を注文して、ようやく亜細亜大学の学生たちの需要を充たしたそうです。一学期すぎてそれを全部買い集めた。中古をね。というのは次に来る亜細亜大学の学生が中古を皆買うだろうと思つたから。そしたら一人も中古を買わない。皆、新品を買う。だから買い集めた中古はアメリカ人の学生が皆買つている。というところでその自転車屋の親父がビックリしたと言つていました。購買力と、物の買い方の感覚とが、アメリカの学生たちと、ちよつとずれてしまつている。それが我々なのです。これはいかんと思うのです。わたしはやっぱ質実剛健であることが必要だと思つております。

戦前ですが、近衛文麿という公爵がいました。近衛家の長男で、後に総理大臣になりました。戦争に負けてから、米軍に逮捕されることを彼の誇りが許さない。青酸カリで自決いたしました人です。この近衛文麿が旧制の一高に入ったのです。その頃、旧制の一高は全寮制度で、本郷、今の東大の農学部の方にありました。木の造の汚い寮、そこへ暮らすことになった。彼は

そこへ入つて他の貧乏な学生と同じように、木綿の袴をはいて、カスリの着物を着て、それで生活していった。そうすると一週に一回ずつ執事がやつてきて洗濯物を頂いていきます。そして新しい羽織、袴を持つてくるのだけど、それが絹なんですね。近衛はもう恥ずかしくて絹なんて着られるかと、それをしまいこんでいたそうです。おい、次は木綿の持つてこいと執事に言つたんですけど、執事はきかない。毎週絹を持つて来る。その度に近衛は友達のカスリの着物を借りて、それで済ました。絹の羽織、袴は、彼の行李の中にたたまこまれて、そして執事がそれを時々交換する、というふうにして一般の寮生と同じような生活をしたという有名な話がございます。僕はそういう寮生活というものを亜細亜大学で再興したいのです。日本の若者の生活程度が高くなつていっているので、とてもできないと思うのですが、しかしそういう志は持つている。そして旧制高校と同じように亜細亜大学の学生が質実剛健な生活をするように、少しでも勧めたいと思つているのです。

それは、国際社会に出ていく時に、すごく大事なことです。金があるから贅沢をするというのでは、どうも国際社会では通じ難いとは思つております。非常に日本人が妬まれてくる。このままでは、世界の孤児になるといふ話は、新聞あるいはテレビ、ラジオでお聞きにな

つたことが、皆さんにもあると思いますけど、私は亜細亜大学の学生を留学させておりますから、実感をもってそれを感じるのですね。別に反日とかなんとかじゃないですけども、一種の妬みがあると見えて、二階からバケツで水ブツ掛けられたのも居ります。イタズラですが、しかしその背後には妬みがあるのです。それからルームメイトが「お前いいモノ持つてるな、ちよつと貸せ」と言つて、上等な目覚し時計を借りつきりに、とり上げてしまつたり、それからかなり贅沢なラジカセ、それをウィークエンドに家へ持つていつてしまつたり、そういう事件が頻発しております。これはアメリカ人が悪いというよりも、アメリカ人のルームメイトと日本人との間の生活の格差があまりにありすぎる。そこに原因があると私はにらんでおります。

— ということで、大変率直に申しましたけれども、諸君はこれから大学生活をお送りになるにあつて、もちろん精一杯生きて欲しいし、精一杯勉強して欲しいのです。特に英語ないしは外国語、それからO A機器、それから日本語、これについてはなかなか大学では教えてくれません。特に意識してお勉強なさることをお勧めいたします。

— そして現在の日本の大学と大学生が持つてゐる三つの問題、一つは大学に勉強する覚悟で

来ている学生が少ないという問題、これを自ら考へて欲しい。それから第二に大学生という一種の特権で執行猶予が許されている時代、甘えることが許されている時代にどう生きてほしいか、自分でよく考へて頂きたい。そして第三点は労働予備軍として、贅沢をするためのアルバイトということがファクションになつておるけれども、それが果してよろしいかどうか、これを考へ直して頂きたい。と、いうことを今日は申し上げたわけでございます。ちよつと十二時になりましたので、これで終わらせて頂きます。御清聴、感謝致します。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。